

北アルプス裏銀座

烏帽子岳・野口五郎岳・水晶岳・鷲羽岳
・三俣蓮華岳・双六岳

毎日新聞旅行

17～20日



鏡平からの槍穂

鏡平方面から三俣蓮華の方面には4回くらい行っているが、野口五郎岳は1974年に最初に行って以来ご無沙汰である。昨年も毎日新聞旅行の北アルプス裏銀座コースにエントリーしたのであるが、今の自分の体力では無理なのではないかと考えてキャンセルしてしまった。今回も体力的な状況は昨年と大して変わらない。しかし昔日の体力への復帰はあり得ない。バテルことを覚悟のうえで行けば歩けないというほどのことはないであろうという楽観的な考えの上に基づいてのことである。先延ばしすれば次はなくなる。裏銀座であれば、北アルプスの中では楽な方であるとの認識もあった。北アルプス登山は2013年の針ノ木から船窪小屋以来のことになる。

ツアーリーダーは昨年九州の英彦山などでお世話になった堀さんと、神室山などを始め最近よく会う宮代さんのスキーインストラクターコンビである。ガイドは2008年に赤牛岳でお世話になった鳥羽一郎の顎を少し長くしたような顔の笠原さんである。メンバーは男8人、女15人で、このうちペア3組。知った顔はいなかった。

烏帽子岳 (2628m)



高瀬ダム



虹

初日は高瀬ダムからブナ立尾根を登って烏帽子小屋までに、烏帽子岳ピストンが追加される。高瀬ダムでタクシーを降りると、山の方には虹も見える。浮かれていたなら、歩き始めてすぐに雨になった。今回は雨具を使わなかったのは、最終日の鏡平からの降りだけだった。

ブナ立尾根は2007年に、烏帽子から船窪小屋へ行ったときに登っている。日本3大急登という説もあるが、もったきつところはいくらかでもある。途中には番号による標識があって、0番が烏帽子小屋で、12番が登山口である。

ガイドの笠原さんは、今回は初心者が含まれているとの情報を得ているらしく、7番目までは2番ごとに休みを入れて、それ以降は1番ずつ休みを入れて、疲労が深くないように気

を使っていた。烏帽子小屋までのブナ立尾根の行程は、それだけの覚悟をしていたので、バテを感じることはなかった。

その後の1時間半の烏帽子岳ピストンのほうが効いた。最後の方は鎖場が多く笠原ガイドはかなりの時間をかけてこの難場を通過した。2008年の赤牛岳の時は、“北アルプスでストックを使うやつはバカだよ”と言われて、コワモチのおじさんと思っていたが、優しい一面もある。

この日は、一日ほとんど雨にたたられた。



烏帽子岳山頂

野口五郎岳 (2924m)

この日は三俣山荘までの8時間以上かかると思われる長丁場である。

野口五郎岳に向かって三ッ岳あたりまで来て振り返ると、前日登った烏帽子岳が名前の通りの姿を現す。

1974年の時は野口五郎岳の前後は登り降りも少なく楽な道だという認識であったが、あの頃と今では体力が違う。案内書の解説記事を読んでも楽なイメージ

でしか書いていないのであるが、岩のゴロゴロがケッコウ足にくる。水晶小屋までは、真砂岳(2862m)などの小さな凸凹を繰り返して進む。相変わらず岩のゴロゴロが歩くペースを乱しにくる。

烏帽子岳と不動岳の遠景



何とか持っていた天気も水晶岳が近付くとまた雨具の出番である。足元は相変わらず岩ゴロゴロが続く。

水晶岳 (2986m)



水晶小屋に着いたときには完全な雨になっていた。小屋から水晶岳は 1 時間半程度のピストンなのであるが、水晶小屋は狭い小屋なのでデポしておくザックの中には入れられない。雨に打たれるままに小屋の外に並べる。たかがピストンなのであるが、雨の中の歩行は気分も滅入る。23 人中 11 人は登頂を回避して先に三俣山荘へ降った。

水晶小屋から三俣山荘への道は鷲羽岳を経由せず黒部川源流を降るコースをとる。コースタイムではこの方が 2 時間のところを 30 分ほど短くて済むが、実際には 2 時間半以上かかった。黒部川源流の道は河原のゴロゴロ石が多くて歩き辛いことが原因か。また河原から三俣山荘に至る後半になると登りになる。大した登りではないのであるが、長丁場のラストは堪える。初心者と言われた人たちにも後れを取る。ガイドの笠原さんも私を気遣って、“高橋さん、大丈夫？”と声をかけてくる。二人だけの会話の時は“ダメだよ！”と答える。皆が聞こえるようなときに声をかけられたときには“大丈夫！”と答える。彼とは 2008 年の赤牛岳でも一緒であったし、烏帽子小屋での夕食後もストックのことなどでいろいろ話し合ったので、何かと私には気を使ってくれる。私が今回のメンバー中の最高齢の 72 歳ということも気を使わざるを得ない要因かもしれない。彼は、“ストックは否定はしないが、自分でバランスが取れる間は使わない方が良い”と言う。私はすでに自分でバランスが取れないから、シングルストックで歩いている。

この夜、寝ているときに腰が痛くなって目が覚めてしまった。出たくもないのに便所に行ったりして気を紛らわせて何とか寝た。

鷲羽岳 (2924m)



三俣山荘からの鷲羽岳

鷲が羽を広げたような形の山ということでこの名前が付いた。この日はまず 2 時間半かけて鷲羽岳をピストンしてから双六岳を超えて鏡平へ降る。

今回の山行は、烏帽子岳・水晶岳・鷲羽岳と 3 回のピストンが含まれていたのので、あらかじめ小さなサブザックを用意しておいた。したがって鷲羽への最初のピストンは気楽に進めるこ



とができた。鷲羽岳に着いたらガスの世界になってしまったが、それまでは今までの分を取り返すように、これから行く三俣蓮華岳や双六岳などの遠景がよく見えた。

三俣蓮華岳 (2841m)

鷲羽岳からの三俣蓮華岳と双六岳



長野・富山・岐阜の3県にまたがる山であるから三俣であるという説もあるが、私としては、野口五郎方面からの尾根と黒部五郎方面への尾根と笠ヶ岳方面への三つの尾根がぶつかる場所であるから三俣であるという説をとりたい。

この日の行程は、三俣蓮華までの登りを我慢すればあとは楽勝と踏んでいた。しかしこの登りもたいしたことはないと思っていたのに身体には堪えた。



双六岳 (2860m)

この山も今までは、先へ進むためのついでの山くらいに考えていた。広々として平らな山容は疲れるとかいう感覚には似合わない。しかし山は変わるはずはないのに自分の方が変わってしまったようである。初めて気が付いたのであるが、標高も三俣蓮華よりも高い。

この日は早朝の鷲羽岳のピストンの最中にガスにまかれ、三俣蓮華の登り中には少し回復したと思ったが、後半の双六では再びガスにまかれ、鏡平への降りではついにまた雨になってしまった。笠原さんは雨具の着用を指示したが、宮代リーダーは“早く降りちゃった方が速いよ”と不服そうであった。



下山

鏡平からの下山はネムケマナコで歩いたって行けるはずであったが、この日も岩のゴロゴロに悩まされた。やはり年取ったために体が硬くなって、一歩が体の直前の方にしか出ないために歩幅が小さくなって、速度が上がらないのであろう。それを意識するとますます心と体が硬くなる。笠原さんが目を合わすたびに“大丈夫？”と声をかけてくる。もうあたりに人がいるときでも“ダメだよ！”と答える。しかしまあ三つあるピークへのピストン登頂のうち、最初の烏帽子岳へは3人、次の水晶岳へは11人、三ツ目の鷲羽岳へは4人が回避した。俺は全部登ったんだから良しとしよう。

次回は西穂高岳である。心もとないけど何とかなるであろう。